

今週のメニュー

■トピックス

◇ニュー・ブランシュ KYOTO 2022 出展作品

～スペースデザインカレッジ、作品名：つつみの間～透（sui）～

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕（52）素戔鳴尊（7）

木下 清隆

■トピックス

◇ニュー・ブランシュ KYOTO 2022 出展作品

～スペースデザインカレッジ、作品名：つつみの間～透（sui）～

2022年10月1日、ニュー・ブランシュ KYOTO 2022（以下、ニュー・ブランシュ）が開催されました。このニュー・ブランシュは京都市の姉妹都市であるパリ市の白夜祭（Nuit Blanche）に着想を得た現代アートの祭典です。12年目を迎える今年は「Aires de jeux（遊び場）」をテーマに、京都内の各会場で日仏アーティストによるビジュアルアートや展覧会が開催されました。

ニュー・ブランシュの会場の一つに白川親水テラスがあります。ここは安土桃山時代の建築である知恩院古門（京都市指定文化財）の門前に位置し、清らかな川の流りに柳並木が美しい情景となっており、ドラマのロケ地にもなるとか。

スペースデザインカレッジ（以下、SDC）は“20歳以上から学ぶ”インテリアデザイン専門の学校です（国内4校）。社会人になったけど将来の夢を諦められずチャレンジする方、仕事をしながら専門的な知識を身に付けたい方などが学んでいます（学生の平均年齢は27歳）。SDCは毎年、ニュー・ブランシュに参加し、白川茶の湯の会と共に茶室作品を出展しています。今回のメルマガでは、SDCのみなさんの作品制作を紹介します（塩ビ工業・環境協会等（VEC、JPEC）は作品に使用する塩ビシートを提供）。

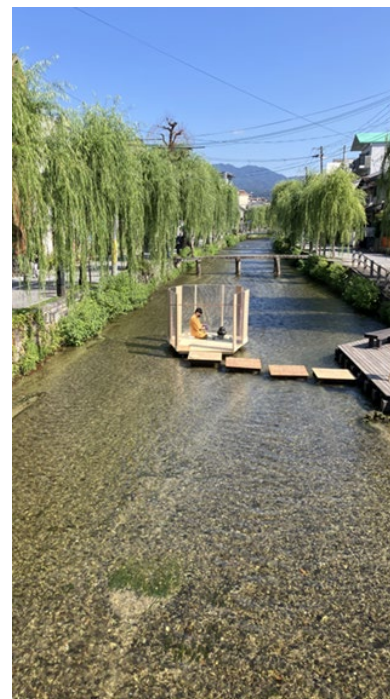


写真1：白川親水テラスと茶室

今年のテーマは【人を隔てるものから人が集まるものへ】です。2020年以来のコロナ禍で街に溢れた塩ビ（PVC）は私達を守ってくれる身近な素材となりました。しかし、逆に塩ビが「人と人を遠ざけるもの」という後ろ向きな印象があることは否めません。そこで、この印象を払拭し、塩ビで人と人の繋がりを生む空間（茶室）を実現したいというコンセプトで作品が立案されました。透明で柔らかい素材／塩ビで人を包み込む形

状の茶室とし、景色や川の流を感じながらお茶を楽しめるようなデザインとなりました（写真1～3）。



写真2：川の上の茶室（夜景）



写真3：幻想的な茶室の内側にて

～硬質塩ビ板ではなく、軟質塩ビシートにこだわったのは～

飛沫防止の塩ビシートのうねりが、私には綺麗に見えたので、これを使って茶室が作れないかと考えました。柔らかい感じを表現したかったこともあり、曲げることができる透明な素材として塩ビシートが良いというこだわりがありました。

実際に茶室が完成して分かったことですが、僅かにうねった塩ビシートが光を反射して柔らかい線を引き、幻想的な光景を作り出していたことは想像以上の仕上がりでした。これは塩ビシートでないとできなかったなあ（高崎さん）。

～作品作りで一番苦労したこと～

厚さ3mmの塩ビシートを1ミリ単位で正確に切り出すことにすごく苦労しました。また、川の中に茶室を作成している最中に塩ビシートが垂れてきて、急遽、アルミのサポートを取り付けました（福田さん）。

～川の上につくる発想は～

大阪や東京の川は水深が深く、京都（白川）のような浅くて流れの早い川はありません。だからこそ、京都の景観や川の流を感じながらお茶を楽しめる空間を考えました（高崎さん）。

また、茶室を組み立てるときはみんなで川の中に入って作業しました。これも白川ならではのことですね（福田さん）。



SDCのみなさん

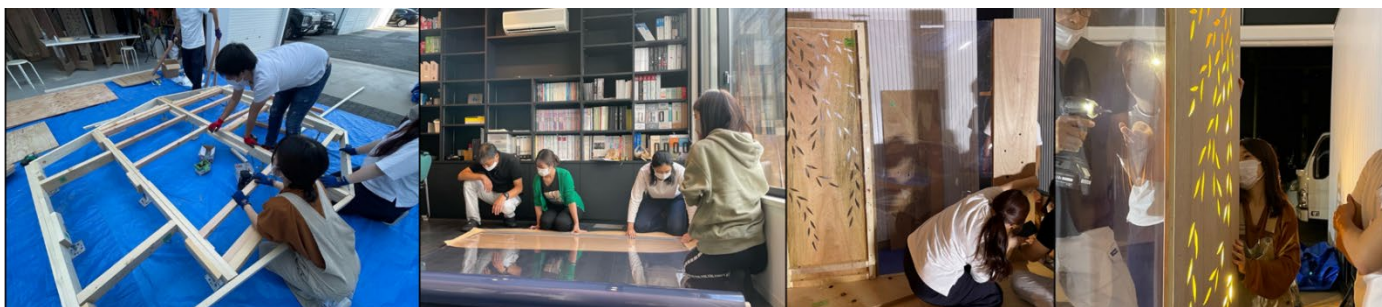
（左 藤本先生、中央 高崎さん、右 福田さん）

～楽しかったこと～

デザインから始まって、設計図、材料の準備、組み立てまで、みんなで考えたものが実際に完成するときには強い達成感がありました（福田さん）。

SDC のみなさん（学生二十数人）が全員で協力して作り上げた今回の作品、塩ビシート越しに見える川の流れと景観も合わさって独特の空気感を持った素敵な空間になりました。また、今回の作品作りを通して、それぞれの学生さんが多くのことを学ばれたのではないのでしょうか？今後、SDC のみなさんがインテリアデザイナーとして夢に向かって邁進されることを念願してやみません。

VECとしては今回のような塩ビを題材とした活動を引き続きサポートしていきたいと考えています。



メイキング風景1～4

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕（52）

木下 清隆

すさのおのみこと
【素戔鳴尊（7）】

<前回とのつながり>

これまでは筆者の推論を述べてきたが、今回は津田左右吉と岡田精二氏の見解を紹介して、この問題に一応の結論を出すことにする。

津田左右吉は『日本古典の研究上』の中で、神代史の形成経緯について、概略すると以下のようなことを述べている。

「神代史が作られた時代は六世紀中ごろの欽明朝前後と推測できるが、たしかな年代を知ることのできるような内的証拠は見当たらない。スサノオの命の物語は、一旦神代史の作られた後に添加せられたものらしい。神代史の最初の述作者が朝廷であるとすれば、それから後の潤色者もほぼ同様であったことが、推測せられる。」(五九一、六七五、六七六、六八一p)

この津田の見解でも、神代史の制作年代の上限を与えてはいるが、それが何時のことかは分からないとしている。更に最初に作られた神代史がその後、書き換えられたことも指摘されている。要するに、書紀の神代史の内容は、原神代史とでもいうべきものとは異

なったものであることになる。このような潤色の一つとして、スサノオ物語が後で書き加えられたことが、示唆されていることになる。

次にイザナギ尊に対し詳細な検討を加えたのは岡田精司氏である。氏は「国生み神話について」『古代王権の祭祀と神話』(前掲)の中で以下概要の〈国生み〉に関する論理を展開している。その論旨の主要な点を要約すると次のようになる。

- a 古代宮廷ではイザナギの神が尊崇された形跡はないが、このイザナギの古い姿を伝えている説話が淡路島を舞台に存在している。
- b 沖縄本島、沖之永良部島等に二神による島造りの伝承があり、イザナギ・イザナミの〈国生み〉も淡路島の地方的な神話だったと考えられる。
- c 「大八洲」は天皇の正式称号と結びつくこと、天皇の支配の及ぶ地域と一致する。
- d 淡路の島生み伝承が朝廷の神統譜に最初に採り入れられた時期は、五世紀末にしぼられてくるが、律令的支配形態に対応する「大八洲」誕生の形に最終的に整えられたのは、天武朝であったと推定できる。
- e イザナギ・イザナミの神話は、記紀の冒頭に記されている くにのとこたちのかみ 国常立神 や あめのみなかぬしのかみ 天御中主神のような編纂者による完全な机上作文とは、違った性格のものであり、民衆の中で生まれた信仰や伝承に基づくものである。それを巧みに専制支配の武器にすり替えている。



伊弉諾神宮
(イザナギ・イザナミ二尊が祀られている)

岡田精司氏の論理は地方神イザナギ・イザナミが、どのように記紀の世界に組み入れられて行ったかを解き明かしている。要約すれば、イザナギ・イザナミ二尊による国生み神話は、淡路島に伝わる信仰或いは古い島生み伝承を基にして、天武朝の記紀編纂時に大八洲誕生の形に整えられた、と結論されていることになる。

従って、その岡田氏の所説を前提とするなら、素戔嗚尊とイザナギ・イザナミ二尊の問題に対しては次のように結論されることになる。

- 淡路島に伝えられていたのは島生み伝承であり、記紀で語られているような神生み伝承ではない。従って、イザナギ・イザナミ二尊によって大八洲が誕生したとする神話が、天武朝において最終的に整えられたとするなら、素戔嗚尊もこの時期に誕生したと考えられることになる。 —

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <https://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp
